

## 令和3年度 第1回新潟市歴史博物館運営協議会 会議録要旨

【日時】 令和3年8月6日(金)  
14時30分～16時15分

【場所】 新潟市歴史博物館セミナー室

【出席委員】 池田 哲夫 会長 (新潟大学人文学部名誉教授)  
本井 晴信 副会長 (元新潟県立文書館 副館長)  
石塚 正朗 委員 (新潟日报社 読者局 事業担当部長)  
上村 啓 委員 (BSN新潟放送 事業局次長 兼 事業部長)  
久保 有朋 委員 (古町花街の会)  
坂井 孝 委員 (新潟市立南浜中学校長)  
渋川 綾子 委員 (にいがた湊あねさま倶楽部)  
津野 治彦 委員 (新潟市立亀田小学校長)  
永田 向太郎 委員 (新潟市小中学生PTA連合会 副会長)  
中村 元 委員 (新潟大学人文学部准教授)  
羽生 英一 委員 (公募委員)

【オブザーバー】 遠藤 和典 新潟市歴史文化課 課長

【事務局】 伊東 祐之 新潟市歴史博物館 館長  
小林 隆幸 新潟市歴史博物館 副館長  
鷲尾 雄二 旧小澤家住宅 館長  
伊藤 泰介 新潟市歴史博物館 総務担当次長  
大森 慎子 新潟市歴史博物館 学芸担当次長  
石田 孝子 新潟市歴史博物館 企画普及課長  
森 行人 新潟市歴史博物館 学芸課長  
設楽 明子 新潟市歴史博物館 職員  
高橋 久美 旧小澤家住宅 職員

## 【 次 第 】

### 1.開 会

### 2.館長挨拶 詳細別紙

### 3.各委員・オブザーバー自己紹介

### 4.協議会・会長の選任 詳細別紙

### 5.議事

#### (1) 令和2年度の館運営報告

##### 1) 博物館

##### 2) 旧小澤家住宅

資料 1～6 に沿って、事務局から説明。

#### ≪ 質疑応答 1 ≫ 詳細別紙

#### (2) 令和3年度の館運営状況

##### 1) 博物館

##### 2) 旧小澤家住宅

資料 7～13 に沿って、事務局から説明。

#### ≪ 質疑応答 2 ≫ 詳細別紙

#### (3) 文化芸術振興費補助金 地域と共働した博物館創造活動支援事業

##### 「古町学事始め」

事務局から口頭で説明。

#### ≪ 質疑応答 3 ≫ 詳細別紙

### 6.閉会

## 《館長挨拶》

(伊東 館長)

今年度から5年間の指定管理を認めていただき、その最初の年となる。コロナ禍で先が見通せない状況で、計画したことができるのか、万全の準備で臨んでもうまく行かないということが起こっている時期となる。その中でよりよくやるということを心掛けていくしかないと思っている。今までも心掛けてきたことではあるが、今回の指定管理期間では他の方、市民だとか他の機関、他の博物館と一緒にやっていくことが大切なこととして考えられてきている。

本日ご説明する文化庁事業についても、当館が主となって行政・市民団体と一緒にやっていくことであるし、たった今も企画展の関連事業で船に乗って港を見るという企画が行われている。これは港湾空港整備事務所の船に乗って、国と協力してやっている。プロジェクトそのものが色々な方の協力で行われている。

今後展開する様々な事業、来年は大河津分水事業を計画しているが、国の分水史料館だとか新潟県内各地の博物館と共同して行うことで現在準備を進めている。それが集客に結びつけば一番良いが、この状況の中では集客よりも着実にやるべきことをやる、というのを目指していく5年間となると思う。様々な課題やご要望もあると思うが、本日ご意見を伺い、よりよい運営を心掛けていきたいと思う。

## 《協議会の会長・副会長の選任》

立候補・他薦がなかったため、事務局より会長職を池田委員、副会長職を本井委員で提案したところ、「異議なし」と了承を得た。

## 《質疑応答1》

(久保 委員)

『いっぴん展』楽しませていただいた。今後、指定管理料が増えることは難しく、財政的に厳しい中で、収蔵品を改めて見直し学芸員それぞれが紹介する、面白い、かつ、お金が無ければできないというものでもなく、非常にいい企画であった。来年・再来年とこういった企画を行う予定は考えているか。

(小林 副館長)

当館の収蔵品を面白く、特徴を引き出して見せようという企画であったが、

背景には予算の問題で輸送費が確保できない、コロナの関係で遠出して調査研究ができない、資料収集ができないということがあった。負の面をプラスに変えようと企画したもの。この状態が好転するとは考えられず、幸いにも面白い資料を収蔵しているので、それにしっかり光を当てる工夫は必要と感じている。

---

(久保 委員)

ボランティア事業について、昨年度の報告より人数が増えている。新規に入った方もいると思うが、コロナ禍の中で活動が限られ、齋藤家別邸では辞める人も出ているので何か工夫があれば伺いたい。

(小林 副館長)

当館のボランティアは職員が管理しているので比較的参加しやすいシステム。コロナで疲れた、そろそろ休みたいといった理由で退会される方も居る。ただ、籍を置きやすい環境ではあるので、人数が減っていないのではないかと思う。

(久保 委員)

博物館講座などにボランティアは無料で参加できるといった特典はあるのか。

(小林 副館長)

講座・講演会は定員があるので、厳密に抽選を行っている。ボランティア向けにはステップアップ講座や解説会があり、企画展・常設展は無料でご覧いただける。スキルアップの面でプラスになっていると思う。歴史文化に興味を持つ方は多く、シティガイドや他の施設のボランティアガイドも活発になっているので、全体的に相関しているのでは。

---

(本井 副会長)

五十嵐俊明は地元で根差しながら創作活動を始めた人物として、これまでも注目はされていた。企画をしていくのが難しいと個人的にもジレンマがあったが、よくおやりになったと感心している。何をやっても不足感は拭えないものだが、最大の努力をされたのは十分わかった。図録プラス資料集の編纂という財産を残したことが、これからの企画のいい踏み台となったと思う。俊明は1回では紹介しきれない。不足だったところを少しずつでもいいので、パート2、パート3を考えていただきたい。その後の系統を引く活動の歴史、現代につながる大きな流れを、資料集を含めて、足跡を残していただけると嬉しい。それができるのはここだけだと思うので、ひとつの使命として取り組んでほしい。

(石塚 委員)

来館者の分析について、リピーターは何%くらいか。

子どもたちの部分と一般の方に対しては方法が異なると思うが、一般の方を増やす取り組みの中で、これまでアウトリーチ的な取り組み、施策として打ち出したものがあったか。

(小林 副館長)

リピーターに関して、確認する根拠としてはアンケート調査があり、現在コロナ禍で不安定なデータしか取れていないが、通常は6割が県外客。地元の方のリピーターはもちろん居るが、割合としては総数から見ると観光客が多く、観光客が減った今、状況は厳しい。

アウトリーチに関して、博物館をPRするアウトリーチではないが、我々職員が出前講座など、出向いて授業をしている。来館者数には出てこないが、我々が呼ばれて講座に行く回数は年間30本、館長を含めると60~70本出向いて行っている。受講者をカウントできるシステムがあると利用率が上がっていくと思う。学校に関してはそれほど多くなく毎年3~4校だが、今年は前半だけで2校行っている。そのようなかたちでアウトリーチ活動は行っているが、来館に結びついているかは難しい。

(石塚委員)

もう少し突っ込んだ取り組みがあってもよいのではないか。どうしても中身が専門的になってしまうので、同じものを何回かに分けて、更に深めていく、分かりやすく、というようなことができるのでは。

(小林 副館長)

以前にも、タイトルが固い、もう少し分かりやすく馴染みのある名称に、とのご意見をいただいている。その辺りを工夫していくことも、とっかかりとしては必要かと思う。

歴史系博物館は企画展のタイトルがどうしても固くなってしまうので、もう少し研究していかなければとは考えている。

(伊東 館長)

プロジェクト事業だと、当館で市民と共同で行ったものは市民プラザや博物館1階や地区事務所などに展示して回している。現在も市民プラザの6階ギャラリーを使ってパネル展を行っている。

(森 学芸課長)

出張展示に加えて、過去の企画展で製作した写真パネルや画像データなどの活用機会もある。クレジットとしては「みなとびあ提供」くらいしか出てこないが、展示で作った成果というのは、そういった形でも活用されている。

---

(石塚 委員)

ファンクラブとの違いは。別の組織か。

(小林 副館長)

ファンクラブは友の会、コアな利用者という位置づけ。ボランティアはスタッフの一部。

---

(上村 委員)

月別来館者数の比較を見ると 11 月にピークが来ている。先ほど令和 2 年度は GOTO キャンペーンで来館者が増えたとの説明があったが、令和元年度も 11 月がピーク。歴史博物館だけでなく旧小澤家住宅も同じく 11 月。要因や集客の秘訣があるのか。

(鷲尾 館長)

11 月 3 日の文化の日に新潟市の施策として文化施設が無料観覧となり、当館の場合大勢の方にご来館いただく。また当館は町歩きとセットでお越しになるお客様が多い。今のような暑い夏よりも GW を含む 4～5 月、10～11 月の気候のいい、散策に適した時期に来館者増える傾向。

(小林 副館長)

文化の日の無料観覧の影響は当館も大きい。文化の日に合わせてイベントを催している。学校団体に対しては「むかしの暮らし展」の企画展を行っている。

## 《質疑応答 2》

(津野 委員)

小中学生の利用について、小学校は 3 年生から社会科が始まり、担任が担当しているが、実は社会科が苦手な教師が非常に多い。その結果、副読本や教科書をそのまま学ぶだけになり、なかなか地域の歴史や本物に触れる機会がない。先ほどの出前講座などは学校にとっては有難い。

以前よりお願いしているバスの費用援助、道具の貸出を検討して欲しいとい

うことに加えて2つ要望したい。

1つは出前講座の中身。社会科の教員と一緒に中身をつくって、来ていただくのを元にして担任がこうやっていけばいいという内容でパッケージできると素晴らしい。

もう1つはタブレットの使い方。すでに夏休みに入っているのが残念だが、「タブレットを持ってみなとびあに行こう」と打ち出すと良かった。子どもたちは授業中でも普通に机に出しているのが、授業中 HP にアクセスして当時の新潟の歴史を学べるといい。また、タブレットを持って博物館にいくと、バーコードを読み取って、説明がある、クイズが出てくるなど楽しく学べる工夫があるといい。

(森 学芸課長)

出前講座に関して、前回の協議会でもご意見いただき昔の道具の貸出を進めている。どのように利用してもらえるか検討中なので更にご意見をいただきたい。パッケージの箱は用意してあるので、博物館サイドで提供できるものと学校の要望を突き合わせて物をセレクトしていく。

HP の利用について、『おうちみなとびあ』などコロナ禍で新たなコンテンツを作っている。子どもたちが満足できるような内容を進めていきたい。今後こういった状況がしばらく続くのでデジタルメニューを増やしていき、学校の授業で使っていただけるように工夫をしていきたい。

(会長)

学校現場と博物館と共同して進めていってほしい。

タブレット等の活用に関してみなとびあの対応は。

(小林副館長)

そういったことができるというのを今初めてお聞きしたので、何ができるかももう少し調べて研究し、どう対応していけるか至急協議していく。

(津野 委員)

今、夏休みで全校がタブレットを家に持ち帰っている。子どもたちは初めてのことでタブレットが大好きなので、タブレットを使って何かするというのはとても食いつきがよい。秋休みなどに何かできるといいと思う。

(森 学芸課長)

タブレットの使用に制限があるのかなど教えていただき、可能性について検

討したい。

(坂井 委員)

フィルタリングはかかっているが公共施設では制限はかかっていないし、アプリを取ってバーコードリーダーも使える。我が校の生徒も本日の新潟巡検にタブレットを持って参加しているが、写真を撮るくらいしかない。もし、タブレットで読み取って資料収集などできればさらに学習が深まる、というのは確かにある。授業だけでなく家でのドリル学習やインターネット閲覧、部活で使う、生徒総会で使うなど使い方は自由。コンテンツさえあればアクセスして、社会科が好きな子は自分で深い学習ができる。

(池田 会長)

積極的な連携をお願いしたい。貴重な情報・ご意見ありがとうございました。

---

(石塚 委員)

コンテンツのひとつとして、学芸員の方が解説を加えるといったような加工をして見られるような仕掛けなど作れないものか。収蔵品はなかなか出てこないものだが素晴らしいものがたくさんあると思う。プロの方がワンポイントを説明するのをいつでも見られるようにすると、コロナ禍で見に行けない方にも活用価値があるのではないか。

(小林 副館長)

展示室ではなく、ホームページ上での対応となるが、コロナ禍の臨時休館で『おうちミュージアム』という全国展開している北海道博物館のコンテンツに便乗する形で、収蔵品を公開している。また、いっぴん展では資料に対して学芸員のコメントを付けて HP 上で公開した。今後増やしていくかは協議していないが、充実させていかなければならないのは課題であると感じている。

(池田 会長)

費用や労力が必要だと思うが、市として財政的な援助はいかがか。

(遠藤 課長)

美術館・博物館の在り方についてはひと昔前とガラリと変わっている。財政面で言うと新潟市は非常に厳しい。みなとびあ歴史発見プロジェクトは様々な企業の皆様に協賛いただき、多数の自助努力で営業いただいている。今後の公的資金の投入は限られており、知恵を絞っての運営が求められている。

また、今ほどの教育関係者の方々のご指導は、世の中でデジタル化が進んでいる中で、博物館にとっても重要な視点。活用の仕方によっては来館者増に繋がるのではないかと期待している。

---

(渋川 委員)

学芸員の説明の話について、今の時代は動画。上手でなくていいので、学芸員が心を込めて紹介する姿を見たい。YouTube でもいいし、実際の展示でバーコードを読み取るとタブレットに映るのもいい。そういったものがあれば進んでいる博物館だなと感じる。

令和2年度の企画展について、『新潟の昭和』はとても面白かった。庶民の視点で良かった。学術的なものも大事だが、身近なものの背景を教えながらの展示はファンを増やすのではないかと思う。

旧小澤家住宅のボランティア企画『新潟の新聞』展の入場者も多かった。GOTO キャンペーンや文化の日の無料観覧だけでない、来場者がかなり多いので、庶民感覚の目線のものも人気があるのではないか。この状況下で前年比7～8割は健闘している。この調子で頑張ってほしい。

(石塚 委員)

新潟日報社では6月にコロナ禍の中で県展を開催した。逆の発想で、審査員の方から大賞作品のいいところを話していただく動画を公開したところ、非常に好評だった。対面での解説がもちろん一番良いが、出来ないという中で東京から招く専門家に味わい方を教えてもらい、感銘を受けたというか、面白く引き込まれた。プロの方は凄いと感じ、興味があると入り込めるのだと実感した。

(池田 会長)

興味を引くことが集客につながるということで、またお考えいただきたい。

---

### 《質疑応答3》

(遠藤 課長)

古町学は知恵を絞ったアイデアのある事業。100%文化庁から補助を貰って歴史博物館が様々な事業者と連携をして組み立てているのは市としても有難いと認識している。文化系だけではなく新潟商工会議所始めとした経済関係の皆さまと、町の振興を目的として様々な事業を組み立てている。古町芸妓の

行列についてもハードルがあったが、商工会議所の支援・協力があって実施するもの。ぜひ注目いただきたい。

また、直接本運営協議会とは関係ないが、昨日 JR 東日本より、来年の4月から、JR 東日本の豪華列車『四季島』で旧齋藤家別邸、燕喜館、古町芸妓を見てもらうツアーが新たに発表された。豪華列車の商品に新潟市の文化的要素が加わったのは喜ばしい話。古町学を含めて、新潟市の方では“みなとまち新潟”を大きく PR していきたい。特に旧齋藤家別邸は国指定の文化財に指定されて、文化的・商業的価値を高め、来館者も増えて行っている非常にいい事例。みなとびあ含めて新潟のみなとまちの文化の発展ができればいいと思い、色々な事業に取り組んでいきたいと考えているのでご支援をお願いしたい。

以上